

リレーエッセイ・
海外派遣
専門家たより

嘉本伊都子

京都女子大学現代社会学部助教授

「しっかり」って、 何だろう？

日本人の国際結婚をテーマに
現代社会学を講義する

アルゼンチンに最初に行ったのは7年前だった。アルゼンチン日系3世のセシリア・マリア・小那覇さんが、久々に帰国するというのでこのこついでいった。そのときはもう二度と来ることもないだろうと、世界最大の瀑布・イグアスの滝から南米最南端の地・ウツシュアイアまで、アルゼンチン縦断旅行を決行した。ところが昨年、再び真夏の京都

から真冬のアルゼンチンへ飛ぶことになった。しかも、彼女のリクエストにより、日本および東アジアについて教えるという初めての海外での集中講義をするためである。

我ながら無謀なことを引き受けてしまったと思う。7年前、博士論文を書き上げたばかりのセシリアが、ブエノスアイレスにある日本庭園で将来の夢を語ってくれた。私と彼女は正反対である。私がお調子もののラテン系で、彼女が生粋の日本人じゃないかと思うほど真面目でコツコツタイプ。そのおとなしいセシリアが、「将来、アルゼンチンと日本の架け橋になるような日本研究所をつくりたい。アルゼンチンの大学には、そのような研究機関がなかったので修士課程はメキシコ大学に行かざるをえなかった。でもここアルゼンチンで、日本研究ができるような環境を私はつくりたい」と。彼女の秘めた闘志に、そして、「しっかりとした未来へのビジョン」に感動した。

彼女はついに、ブエノスアイレス市近郊のラ・プラタ市にあるラ・プラタ大学国際関係研究所のコーディネーターとなった。非常勤であり専任ではない。時給に直せば、アルゼンチンでは大学の非常勤講師の給料よりも、メイドさんの1日の給料のほうが良いという。彼女は何年間か琉球大学で講師をしていた。契約を更新したほうが、金銭的には豊かであっただろう。しかし、お金ではないのだ。アルゼンチンの人が一人でも多く、東洋に興味を持ってくれて、やがては素晴らしい外交官や学者が育つことが彼女の夢なのだ。微力ながら、彼女の夢のお手伝いに馳せ参じたという次第である。

彼女

の教え子で外交官をめざすエセ

キエロ君は大学院生である。一度も日本へ行ったことはないが、日本語が流暢な好青年で、これだけ深い教養のある25歳に日本ではなかなかお目にかかれない。アルゼンチンタンゴへ連れて行ってくれたが、そのエスコート

はにっぴり農いで交ちの
で婚な「嫁」を立く
学行フがー真多
大際を人しィ写介ど
国際は日とフの紹ほ
タ国義日系とフの紹ほ
ブラの講の日」をの紹ほ
・人この日」をの紹ほ
・本すこの日」をの紹ほ
ラ・日関た。ピン花事ーなが出集
日関た。ピン花事ーなが出集
ラ・日関た。ピン花事ーなが出集

写真提供：筆者（以下も同じ）



ぶりは、アルゼンチンのマテイ
スモを感じさせながらも、日本
人的な礼儀をわきまえた実に
「しっかり」としたものであった。
セシリアが、日亜学院という
日系人のための学校にポランテ
イアで日本史を教えに行くの
で、一緒に行かないかと誘って
くれた。こうやってときどきセシ
リアは無給で教えている。一人熱
心に聞き入る女子生徒がいた。
あとで「彼女は私の宝物」といっ

かもと いつこ ● 総合研究大学院
 大学・文化科学研究科国際日本研
 究専攻修了、博士号取得。国際日
 本文化研究センター講師、龍谷大
 学講師、日本学術振興会海外（ロ
 ンドン大学）研究員を経て、
 2001年より京都女子大学現代社
 会学部専任講師、04年より現職。
 主な著書に『国際結婚の誕生—く
 文明国日本へへの道』



↑日亜学院で教えるセシリアさん。日系、中国系、
 韓国系、アルゼンチン系が集まり、熱心に聴講す
 る。左後方で立っているのは校長のシマツさん
 ←ラ・プラタ市の行きつけのレストランで。右か
 ら、川端康成のファンというウエイトレス、筆者、
 友人のセシリア・マリア・小那覇さん



て嬉しそうに笑うセシリアの頭
 からマリアさまのような後光が
 さしている気がした。まさに彼
 女のミドルネームそのものだ。

日系

人の日亜学院の
 校長先生アレハ
 ンドロ・シマツさんは教育学が

ご専門で、日本への留学経験も
 ある。なんと、その日亜学院に
 中国系や韓国系の子どもたちだ
 けでなく、アルゼンチンの子ど
 もたちもいる。彼らの入学理由
 は、マンガやテレビゲームの影
 響が大きいのだという。確かに
 テレビをつければ、スペイン語
 にふきかえられたアニメが流れ
 ない日はない。テーマソングは
 日本語で流れる。その日系の校
 長先生がおもしろいことを教え
 てくれた。「いくら、日系の子
 どもたちに『もつと、しつかり
 しろ』といつても、スペイン語
 には『しつかり』という言葉が
 ないんですよね。『しつかり？
 何それ？』と。

アルゼンチンには上昇志向と
 いうものがあまり感じられない。
 ラテン気質といってしまうえばそ

れまでだが、「天然資源にめぐ
 まれたアルゼンチンを上昇させ
 ないようにアメリカが邪魔をし
 ているんだ」という意見をよく
 耳にした。

文化

人類学を専攻し
 ている学生に、ア

ルゼンチンでミドルクラスの職
 業は何かと聞いたたら、「レスト
 ランのウエイター」という答え
 が返ってきて驚いた。セシリア
 に確かめたら、コーヒーショッ
 プの店員ですら、アルバイトで
 はなく、いつ首になるかわから
 ない正規の職という位置づけな
 のだという。将来に希望が抱け
 ない社会のなかで漂流する日本
 社会の若者の未来像が、このア
 ルゼンチン社会にすでにあるよ
 うな気がしてならなかった。む
 しろ、閉塞した日本社会がもつ
 ともお手本とすべきは、アルゼ
 ンチンのような成熟社会なのか
 もしれない。

ラ・プラタ市にあるお気に入り
 のレストランでは、かわいい
 大学生ぐらいの女性がサーブレ
 てくれた。私が英語しか理解で

きないことがわかると、一生懸
 命英語でメニューを説明してく
 れた。「日本人ですか」と聞か
 れ、そうだと答えると目を輝か
 せて「私、川端康成の大ファン
 なんです！」といった。川端を
 愛読し、英語も話せ、ラ・プラ
 タという地方都市でウエイトレ
 スをしている若者はミドルクラ
 スに違いない。

アル

ゼンチンでは、日
 本より中国にも

つと強烈な関心が芽生えつつあ
 ることを肌で感じた。食料の豊
 かなアルゼンチンに、十何億と
 いう人口を抱える中国が目をつ
 けないわけがない。アルゼンチ
 ンにとつてもビジネスチャン
 スだ。中国人とのビジネスは、か
 なりタフでなければならな
 る。すると「しつかり」した
 アルゼンチンの若者も出てくる
 かもしれない。

では、日本の若者はどうなる
 のだろう。日本の大学へ戻って、
 「しつかり」と若者たちと向き
 合う必要性を感じたアルゼンチ
 ンの冬の8月であった。☺